

## 概要

アクセントとは、単語ごとに決まっている。高さ・強さ・長さなどのパターンである。日本語の場合は強さや長さはアクセントに関係せず、高さの下がり目がアクセントである。

単語のアクセントは、それぞれの単語ごとに、音の高さの急激な下がり目が、

- あるか、ないか
- あるとしたら、どこにあるか

が決まっている。

下がり目は、「アクセント核」と呼ばれることがある。

日本語のアクセントは単語ごとに恣意的に、特に理由がなく不規則に決まっているため、単語を見ただけではその単語のアクセントは分からず。また正書法にも示されていない。従って、日本語のアクセントは、非母語話者にとっては、単語ごとに調べたり、覚えたりしなければ、正確には発音できない性質のアクセントであると言える。

日本語のアクセントは地方だけでなく、話者の世代や所属集団に因って異なる場合があり、また時代に因って変化もする。このドキュメントで採用したアクセントは、東京を中心とした首都圏で使用されている東京語（標準語）のアクセントである。



## 日本語のアクセントの型



アクセントの種類は大きく「平板式」と「起伏式」とに分けられる。

平板式（アクセント核を含まない式）

平板型（0）

アクセントの下がり目がない型。尾高形と異なり、次に助詞などが来ても下がらないそのままの高さで発音される。

起伏式（アクセント核を含む式）

頭高型（1）

単語の一番初めの拍にアクセントの下がり目が来る。

中高型

単語の途中にアクセントの下がり目が来る。

尾高形（-1）

単語の最後にアクセントの下がり目が来る。この場合、単語単独で発音したときにはアクセントの下がり目がない平板型との区別はできないが、単語の後に助詞が付いたときにそこから低くなる。

型の数は拍数よりも一つ多い。

その数は型ごとに平等配分されておらず、単語の長さに因って傾向がある。

一拍語・二拍語は、「1」型の方がかなり多い。

三拍語は、[0]型、次いで[1]型が多い。

四拍語は、[0]型の方が多い。

五拍語以上は[−3]型（後ろから数えて三拍目の後で下がる型）。

用言（形容詞・動詞）には、二種類のアクセントだけである（終止形）。

平板式[0]、起伏式[−2]

活用形のアクセントは、終止形のアクセント種類によって類推ができる。

## 特殊な拍

### 特殊な拍とアクセントとの関係

引き音（-）、撥音（ン）、促音（ツ）のような拍はアクセントの頂点が起きにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこに来ると、その位置が原則として前にずれる。

- (1) 引き音：ニチヨー↓ビ → ニチヨ↓ビ（日曜日）
- (2) 撥音：シンブン↓シャ → シンブ↓ンシャ（新聞社）
- (3) 促音：ジュウイツ↓サイ → ジュウイ↓ツサイ（十一歳）

### 二重母音の拍とアクセントとの関係

前の拍の母音と一緒にになって、二重母音のように発音される イ、ウ、エ のような拍は、アクセントの頂点が起きにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこに来ると、その位置が原則として前にずれる。

経済力：ケイザイ↓リヨク → ケイザ↓リヨク

### 母音の無声化拍とアクセントとの関係

無声化：声帯が振動していないものと考えるのが良い。

日本語では、カ・サ・タ・ハ・パ行音の子音が無声子音です。母音が聞こえにくくなるのは、「き・く」、「し・す」、「ち・つ」、「ひ・ふ」、「ぴ・ふ」の後にカ・サ・タ・ハ・パ行音が連続した場合です。

【後続の音環境】(後ろ次のような場合に、無声化拍になる可能性がある)

- 1) 後ろが《カ・サ・タ・ハ・パ行》、《促音【ツ】 + カ・サ・タ・ハ・パ行》の場合。
- 2) 後ろに何もない（つまり、文末での言い切り）

母音の無声化するような拍は、アクセントの頂点が起きにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこに来ると、その位置が原則として前にずれる。

父：ち↓チ → チチ↓

記者：き↓シャ → きシャ↓

## 文の発音

基本的には、「アクセントの下がり目があれば下がる」という原則に従えば、文においても自然な発音が実現できる。

- ①文の初めて、低→高の上昇がある（頭高型以外）
- ②アクセントの下がり目があるまでは、高いまま下がらない。
- ③最初のアクセントの下がり目があるところで、高さが急激に下がる。
- ④2つ目以降のアクセントの下がり目では、少しだけ下がる。
- ⑤一度下がったら、そのまま低いまま保たれる（ただし、次節⑥も参照）。
- ⑥文の途中意味の切れ目や文のフォーカスが来たときは、そこから新しく始める。

下げるところと異なり、上げるところは単語について決まっていないので、アクセントとしてこのドキュメントに示すことはしない。

ここから、上げは意味に関する一種のイントネーションと位置付けられる。文頭はそのイントネーションが最も普通に付与されるところである。単語を単独で発音すると文頭で発音したことになり、そこに上げが与えられるのである。



一拍目から二拍目への上げはイントネーションであり、アクセントではない。  
平板型の意味とは、何処でも下がることがないという性質なのである。

## 名詞の傾向

一般的に、アクセントは語によって違いますので、1つ1つ覚えていくしかありません。そのため、アクセントを習得するには、1つ1つの単語のアクセント核を聞き取れる力を先に習得する必要があります。

### 一拍語

平板型：～30%

日常語としてよく使われる語。

頭高型：～70%

漢語・日常用いない語彙・新造語は、ほとんどこの型。

### 二拍語

平板型：～20%

尾高形：～20%

頭高型：～60%

漢語・外来語・日常用いない語彙・新造語は、ほとんどこの型。

### 三拍語

平板型：～50%

尾高形：<10%

中高型：<10%

頭高型：～30・40%

### 四拍語

平板型：～70%

尾高形：最も少なく、大部分は、平板型にも中高型にも発音される。

中高型

[2]：～10%

[3]：～10%

頭高型：～10%

### 五拍語

平板型：～30%

尾高形：現在は極めて少ない。

中高型

[2]：～10%

[3]：～50%

[4]：～10%

頭高型：服属語彙は極めて少ないが、外来語には比較的多い。

## 六拍語

平板型：～20%

尾高型：所属語彙は極めて少數。

中高型

[2]：所属語彙は極めて少數。

[3]：～35%

[4]：～35%

[5]：<10%

頭高型：所属語彙は極めて少數。

## 外来語の傾向

外来語は、普通語末から3拍目にアクセント核が来ます（－3）。ただし、語末から3拍目が特殊拍（ツンー、二重母音の第二要素）の場合は、アクセント核が前の拍に移ります。

二拍語-原則として頭高型（2拍しかない単語は語末から3拍目の音がないので、語末から2拍目になります）。

ジャム、パイ、ピン（頭高型）

三拍語-原則として頭高型（－3）。但し、引き音で終わるものは（〇〇ー）、原語のアクセントが影響する傾向がある。

クラス、ケーキ、ダンス、セット（頭高型）

グレー、スター、タブー、フリー（中高型）

四拍語-頭高型が過半数に近いが、次いで中高型（2）が、次に平板型がこれに続く。

[〇ツ〇〇] [〇ー〇〇] [〇ン〇〇] のような形で、2拍目が特殊拍の外来語⇒頭高型（－3+特殊拍）。

カップル、ゴージャス、ドーナツ、キャンセル、コンパス

[〇〇ツ〇] [〇〇ー〇] [〇〇ン〇] のような形で、3拍目が特殊拍の外来語⇒中高型（－3）。

ドリップ、ラケット、アパート、イコール、スタンス

[〇〇〇ー] [〇〇〇ン] のような形で、4拍目が特殊拍の外来語⇒頭高型。

カロリー、コメディー、トロフィー、ヘルパー、シナモン

[〇〇〇〇] のような形で、特殊拍を全く含まないの外来語⇒平板型。

アパレル、アルバム、イグアナ、オカルト、オムレツ、カリスマ

五拍以上の語-終わりから三拍めまで高い型が多い（－3）。

エゴイスト、チョコレート、ビスケット、ヨーグルト、アルファベット

ただし、[〇〇〇〇〇ー] のような形で最終拍が長音の外来語も、中高型（－4）になる傾向がある。

イデオロギー、テクノロジー、マイノリティ

## 複合名詞

2つ以上の語を組み合わせてできた語を「複合語」という。

「世界記録」の「世界」は前部要素、「記録」は後部要素と呼ばれる。

2つの名詞が複合して1つの名詞になった場合のアクセント型は、複合した2つの単語を別々に言うときと同じアクセント型をそれぞれ保つということはありません。別々に言う時はそれぞれアクセント核があっても、1つの単語に複合した場合はアクセント型が変わります。

複合名詞のアクセントに規則があり、特に後部要素によって決まることが多い。

複合名詞のアクセントは、いくつかのパターン（型）に分類することができる。ここでは、大きく、以下の4つのパターンを示すことにする。

1) 後部一型：後部要素の一拍目のあとに下がり目がある型。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} \downarrow$$

2) 前部末型：前部要素の最終拍のあとに下がり目がある型。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \textcircled{O} \downarrow \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

但し、前部末型の語のうち、前部要素の最終拍が、特殊拍またはそれに準ずる音（二重母音の第二要素や無声化音）である場合は、下がり目が一拍前にずれる。

3) 後部保存型：後部要素のアクセントをいかす型。

4) 平板型：複合名詞全体が平板となる型。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

以上に示した1)～4)のパターンは、一つの後部要素につき必ずしも一つとは限られない。複数のパターンを持つ場合もある。

a. 前部要素に関わらず、2つのパターンがあるもの。2つのパターンの打ち、初めに示した型が優先のアクセント型となる。

《例》件数：後部保存・後部一

$$\textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{O} \text{ケンス} \downarrow - , \textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{O} \text{ケ} \downarrow \text{ンス} -$$

b. 前部要素によってパターンが異なるもの。複数のパターンの間に当然ながら優先位置はない。

《例》坂

前部末： $\textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{O} \downarrow \text{ザカ}$

平板： $\textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{O} \text{ザカ}$

## 複合名詞のアクセントの傾向

複合名詞のアクセントのパターンとしては、後部一型が一番多い。前部末型がそれに次ぐ。

### ①後部要素が1～2拍の場合

ほとんどが前部末型。

《例》～機、～市、～区、～地、～感、～心、～序、～駅  
一部は平板型。

《例》～語、～化、～顔、～性、～的  
なお、後部要素が2拍の場合は後部一型となる場合もある。  
《例》～価値、～正義、～都市

### ②後部要素が3～4拍の場合

後部要素が頭高、平板（または尾高）の語について、後部一型。

《例》～市場、～判断、～科学（頭高）  
《例》～油、～確認、～加工（平板または尾高）

後部要素が中高の語については、以下の3とおり。

後部一型

《例》～案内、～表現、～材料

後部一型と後部保存型の両方

《例》～件数、～哲学、～燃料

後部保存型

《例》～作物、～自動車、～事務所

### ③後部要素が5拍以上の場合は、後部保存型。

《例》～委員会、～裁判所、～注意報、～物語

## 形容動詞

一般的に、アクセントは語によって違いますので、1つ1つ覚えていくしかありません。そのため、アクセントを習得するには、1つ1つの単語のアクセント核を聞き取れる力を先に習得する必要があります。

4拍・2字の形容動詞は、一般的に平板型。

《例外》丁寧、親切、熱心、十分

最後の拍は「か」である3・4拍の形容動詞は、普通語末から3拍目にアクセント核が来ます（-3）。

《例》豊か、静か、微か、愚か、賑やか、爽やか、鮮やか、細やか、安らか、麗らか

さ：

平板型形容動詞：[0]

起伏式形容動詞：[-2] (アクセント核は「さ」の前にある)

## 名詞に付属語が付いた場合の発音とアクセント

原則：殆どの付属後は、前にある名刺部分のアクセントに、影響を与えない。アクセントは変わらない。

### 基本接続

#### 平板式付属語

付属後の内、「下がり目」を持たないもの。名詞部分にそのまま連なる。

$$\begin{array}{rcl} \text{○○} + \text{●●} & = & \text{○○} \text{●●} \\ \text{○} \downarrow \text{○} + \text{●●} & = & \text{○} \downarrow \text{○} \text{●●} \\ \text{○○} \downarrow + \text{●●} & = & \text{○○} \downarrow \text{●●} \end{array}$$

#### 【一拍の付属語（全て）】

か、が、だ、で、と、に、は、へ、も、や、を

#### 【二拍の付属後のうちの一部】

から、だけ、って、として、ほど

一般に、付属後にさらに付属語が重なるときには、「下がり目」をはさむ。

#### 《例》サケカラ（酒から）

ミ↓ソカラ（味噌から）

コメ↓カラ（米から）

サケダケ↓ダ（酒だけだ）

#### 起伏式付属語

付属後の内、「下がり目」を持つもの。

#### 【二拍以上の付属語（大部分）】

[1]：かも、ぐらい・くらい、こそ、さえ、しか、すら、だった・だって、だと、です、でした、では、でも、とか、とは・とも、など、なのだ・なので・なのに、なら・ならば、なんか、なんて、には・にも、のみ、ばかり、へは・へも、まで、みたいだ、より

[2]：だろう、でしょう、らしい（推量）

##### a. 名詞部分が平板式の場合

「原則」通り、名詞部分のアクセントに影響されない。付属後の「下がり目」も生きる。

$$\text{○○} + \text{●} \downarrow \text{●} = \text{○○} \text{●} \downarrow \text{●}$$

《例》サケ+マ↓デ = サケマ↓デ（酒まで）

##### b. 名詞部分が起伏式の場合

「原則」通り、名詞部分のアクセントに影響されない。付属後の「下がり目」も生きる。

また、名詞部分の末尾に「下がり目」があり(=尾高形)、なおかつ付属語部分の一拍目の直後に「下がり目」がある場合には、それが消えて名詞部分の「下がり目」のみが現れるような型も出てくる。

$$\begin{array}{l} \textcircled{O}\downarrow\textcircled{O} + \bullet\downarrow\bullet = \textcircled{O}\downarrow\textcircled{O}\cdot\bullet\downarrow\bullet \\ \textcircled{O}\textcircled{O}\downarrow + \bullet\downarrow\bullet = \textcircled{O}\textcircled{O}\downarrow\cdot\bullet\downarrow\bullet \end{array} \quad \text{または} \quad \textcircled{O}\textcircled{O}\downarrow\bullet\bullet$$

$$\begin{array}{l} \text{《例》ミ}\downarrow\text{ソ} + \text{マ}\downarrow\text{デ} = \text{ミ}\downarrow\text{ソ}\cdot\text{マ}\downarrow\text{デ} \text{ (味噌まで)} \\ \text{コメ}\downarrow + \text{マ}\downarrow\text{デ} = \text{コメ}\downarrow\text{マ}\downarrow\text{デ} \text{ (米まで)} \end{array}$$

### 『付属語不干涉』の原則に対する例外

#### 「の」が付く場合

「の」が「尾高形」に付いた場合には、例外的に、名詞部分の「下がり目」が消えて全体として平板型に鳴ることが多い。

$$\begin{array}{l} \text{《例》コメ}\downarrow + \text{ノ} = \text{コメノ} \text{ (米の)} \\ \text{サシミ}\downarrow + \text{ノ} = \text{サシミノ} \text{ (刺身の)} \end{array}$$

また、「中高型」で最後が特殊拍（二重母音の福音も含む）である語の中にも、平板型になる傾向のある言葉がある。

$$\begin{array}{l} \text{《例》キノ}\downarrow - + \text{ノ} = \text{キノノ} \text{ (昨日の)} \\ \text{オトトイ}\downarrow + \text{ノ} = \text{オトイノ} \text{ (一昨日の)} \\ (\text{[オトトイノ]} \text{ もある}) \\ \text{ニホ}\downarrow\text{ン} + \text{ノ} = \text{ニホンノ} \text{ (日本の)} \end{array}$$

しかし、数詞や順序を表す言葉を中心に、「原則」どおり、名詞部分の「下がり目」がそのまま生きるものもある。

$$\begin{array}{l} \text{《例》ミツ}\downarrow + \text{ノ} = \text{みつ}\downarrow\text{の} \text{ (3つの)} \\ \text{イチニチ}\downarrow + \text{ノ} = \text{イチニチ}\downarrow\text{ノ} \text{ (一日の)} \\ \text{ニド}\downarrow + \text{ノ} = \text{ニド}\downarrow\text{ノ} \text{ (二度の)} \end{array}$$

また、母音の無声化の影響で「下がり目」の位置が移動したために尾高形になっている名詞でも、名詞部分の「下がり目」がそのまま生きる傾向が極めて強い。

$$\text{《例》キチ}\downarrow + \text{ノ} = \text{キチ}\downarrow\text{ノ} \text{ (基地の)}$$

#### [ぐらい・くらい] [らしい (本質性)] が付く場合

「原則」に反して、名詞部分のアクセントが消えて、付属語のアクセントが生きる場合がある。

$$\begin{array}{l} \textcircled{O}\textcircled{O} + \bullet\downarrow\bullet\bullet = \textcircled{O}\textcircled{O}\bullet\downarrow\bullet\bullet \\ \textcircled{O}\downarrow\textcircled{O} + \bullet\downarrow\bullet\bullet = \textcircled{O}\textcircled{O}\downarrow\bullet\bullet \\ \textcircled{O}\textcircled{O}\downarrow + \bullet\downarrow\bullet\bullet = \textcircled{O}\textcircled{O}\bullet\downarrow\bullet \end{array}$$

$$\text{《例》サケ+グ}\downarrow\text{ライ} = \text{サケグ}\downarrow\text{ライ} \text{ (酒ぐらい)}$$

サケ+ラシ↓イ = サケラシ↓イ (酒らしい)  
ミ↓ソ+グ↓ライ = ミソグ↓ライ (味噌ぐらい)  
ミ↓ソ+ラシ↓イ = ミソラシ↓イ (味噌らしい)  
コメ↓+ぐ↓らい = コメグ↓ライ (米ぐらい)  
コメ↓+ラシ↓イ = コメラシ↓イ (米らしい)

## 動詞に付属語が付いた場合の発音とアクセント

傾向：付属語は、前にある動詞部分のアクセントに、影響を与えないものが多い。アクセントは変わらない。

### 基本接続

#### 平板式付属語

付属後の内、「下がり目」を持たないもの。  
「傾向」のとおり、動詞部分のアクセントに影響を与えない。

##### a. 単純型

動詞部分にそのまま連なる。

$$\begin{array}{rcl} \textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} & = & \textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} \quad (0) \\ \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} & = & \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} \quad (-3 \cdot -4) \end{array}$$

#### 【平板式付属語（単純型）】

だけ (0 · - 4)  
ほど (0 · - 4)  
た・だ (0 · - 3)  
て・で (0 · - 3)  
に (0 · - 3)

一般に、付属語にさらに付属語が連なるときには「下がり目」をはさむが、「ほど」の「下がり目」をはさまないものも使われる。

#### (例・平板式動詞)

するだけ  
救うほど  
進んで  
頂いた  
買いに

#### (例・起伏式動詞)

ノ↓ムダケ (飲むだけ)  
タベ↓ルホド (食べるほど)  
モ↓ッタ (持った)  
アジワ↓ッテ (味わって)  
ミ↓ニ (見に)

### b. 「下がり目」挿入型

動詞部分が「平板式」の場合には、間に「下がり目」をはさむ。

$$\text{○○} + \text{●●} = \text{○○} \downarrow \text{●●}$$

動詞部分が「起伏式」の場合には、動詞部分にそのまま連なる。

$$\text{○} \downarrow \text{○} + \text{●●} = \text{○} \downarrow \text{○} \text{●●}$$

平板式付属語（「下がり目」挿入型）

が

から

けれど・けれども

し

しか

って

と

なら

のだ

ので

のに

は

ば

起伏式付属語

付属後の内、「下がり目」を持つもの。

「傾向」のとおり、動詞部分のアクセントに影響を与えない。

### a. 単純型

動詞部分にそのまま連なり、付属後の「下がり目」も生きる（ただし起伏式動詞の場合、通常の発音では、付属語の「下がり目」による音調の下降（=二度目の下降）は、一度目の下降に比べると大きくない）。

平板式動詞 + 起伏式付属語

$$\begin{aligned}\text{○○} + \text{●} \downarrow \text{●●} &= \text{○○} \text{●} \downarrow \text{●●} \\ \text{○○} + \text{●●} \downarrow &= \text{○○} + \text{●●} \downarrow\end{aligned}$$

起伏式動詞 + 起伏式付属語

$$\begin{aligned}\text{○} \downarrow \text{○} + \text{●} \downarrow \text{●●} &= \text{○} \downarrow \text{○} \cdot \text{●} \downarrow \text{●●} \\ \text{○} \downarrow \text{○} + \text{●●} \downarrow &= \text{○} \downarrow \text{○} \cdot \text{●●} \downarrow\end{aligned}$$

【起伏式付属語（単純型）】

[1]

くらい・ぐらい  
そうだ（伝聞）  
ところが  
ばかり  
まで  
みたいだ  
ようだ  
より  
たら（だら）  
たり（だり）

[2]

らしい

「たら・だら」「たり・だり」が起伏式動詞に連なる場合には、付属語部分の「下がり目」が消えて、動詞部武運の「下がり目」のみが現れる。

$\text{○}\downarrow + \text{●}\downarrow\text{●} = \text{○}\downarrow\text{●●}$   
《例》ノンダリ（飲んだり）  
 $\text{○}\downarrow\text{○} + \text{●}\downarrow\text{●} = \text{○}\downarrow\text{○}\text{●●}$   
ミタラ（見たら）  
《例》タベタリ（食べたり）  
アジワッタラ（味わったら）

### b. 「下がり目」挿入型

動詞部分が「平板式」の場合には、間に「下がり目」をはさみ、付属語の「下がり目」も生きる（「下がり目」をはさまない型もまれに使われる）。

$\text{○}\text{○} + \text{●●}\downarrow\text{●} = \text{○}\text{○}\downarrow\cdot\text{●●}\downarrow\text{●}$   
または  $\text{○}\text{○}\text{●●}\downarrow\text{●}$

動詞部分が「起伏式」の場合には、動詞部分にそのまま連なり、付属語の「下がり目」も生きる（ただし通常の発音では、付属語の「下がり目」による音調の下降（=二度目の下降）は、一度目の下降に比べると大きくない）。

$\text{○}\downarrow\text{○} + \text{●●}\downarrow\text{●} = \text{○}\downarrow\text{○}\cdot\text{●●}\downarrow\text{●}$

### 【起伏式付属語「下がり目」挿入型】

だろう・でしょう [2]

式保存型の付属型

動詞部分が「平板式」の場合には、全体として「平板式」になる。

$$\text{○○} + \text{●●} = \text{○○●●}$$

動詞部分が「起伏式」の場合には、全体として「起伏式」になる【下がり目】の位置が、動詞部分から付属語部分に移る)。

$$\text{○}\downarrow\text{○} + \text{●●} = \text{○○●}\downarrow\text{●}$$

### 式保存型の服属語

せる・させる (0 ·- 2)

れる・られる (0 ·- 2)

そうだ (推量) (0 ·- 3)

たい (0 ·- 2)

ながら (0 ·- 3)

### 「～ない」の類

#### 「～ない」

動詞部分が「平板式」の場合には、全体として「平板式」になる。

$$\text{○○} + \text{●●} = \text{○○●●} (0)$$

動詞部分が「起伏式」の場合には、全体として「起伏式」になる【下がり目】の位置が、動詞と付属語の接合部分に生じる)。

$$\text{○}\downarrow\text{○} + \text{●●} = \text{○○}\downarrow\text{●●} (-3)$$

(例・平板) しない

(例・起伏) ノマ↓ナイ (飲まない)

#### 「～ないで』～なかった』～なくて』～なければ」

動詞部分が「平板式」の場合には、付属語部分のアクセントが生きる。

$$\text{○○} + \text{●●●} = \text{○○●}\downarrow\text{●●} (-3)$$

動詞部分が「起伏式」の場合には、全体として「起伏式」になる【下がり目】の位置が、動詞と付属語の接合部分に移り、付属語部分の「下がり目」は消える)

$$\text{○}\downarrow\text{○} + \text{●●●●} = \text{○○}\downarrow\text{●●●●} (-4)$$

(例・平板式動詞)

しないで

しな↓かった

しなくて

しな↓ければ

(例・起伏式動詞)

タベ↓ナイデ (食べないで)  
タベ↓ナカッタ (食べなかった)  
タベ↓ナクテ (食べなくて)  
タベ↓ナケレバ (食べなければ)

付属語不干涉

動詞部分のアクセントが消え、付属語のアクセントが生きる。

平板式動詞

○○ + ●● = ○○●↓●

起伏式動詞

○↓○ + ●● = ○○●↓●

【付属語決定型】

う・よう： - 2

たかった： - 4

たければ： - 4

たくて： - 3

つつ： - 2

なさい： - 2

ます： - 2

ました： - 3

ません： - 2

ましよう： - 2

やすい： - 2

にくい： - 2

<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/jpn/search/index/category:verb/order:name>

## 動詞一覧表

### 終止形 (0・-2)

起伏式アクセントの動詞の場合は、辞書形のアクセント核の位置は後ろから数えて2番目の拍です。

### 連用形中止 (0・-2)

### 可能動詞 (0・-2)

### 命令形 (-1・-2)

### 平板式付属語

#### 単純型

た・だ (0・-3)

だけ (0・-4)

て・で (0・-3)

に (0・-3)

ほど (0・-4)

#### 「下がり目」挿入型

から (-3・-4)

が (-2・-3)

けれど (-4・-5)

し (-2・-3)

しか (-3・-4)

と (-2・-3)

って (-3・-4)

なら (-3・-4)

のだ (-3・-4)

ので (-3・-4)

のに (-3・-4)

は (-2・-3)

ば (-2・-3)

### 起伏式付属語 (動詞部分にそのまま連なり、付属語の「下がり目」も生きる)

#### 単純型

くらい・ぐらい (-3)

そうだ (伝聞) (-3)

たら・だら (-2・-4)

たり・だり (-2・-4)

どころか (-4)

ばかり (-3)

まで (-2)

みたいだ（-4）  
ようだ（-3）  
より（-2）  
らしい（-2）  
「下がり目」挿入型  
だろう（-2）  
でしょう（-2）

#### 式保存型

せる・させる（0・-2）  
そうだ（推量）（0・-3）  
たい（0・-2）  
ながら（0・-3）  
れる・られる（0・-2）

#### 「～ない」の類

ない（0・-3）  
ないで（-3・-4）  
なかつた（-4・-5）  
なくて（-3・-4）  
なければ（-4・-5）

#### 付属語決定型

う・よう（-2）  
たかった（-4）  
たがらない（-3）  
たがる（-2）  
たくて（-3）  
たければ（-4）  
つつ（-2）  
なさい（-2）  
にくい（-2）  
ました（-3）  
ましよう（-2）  
ます（-2）  
ません（-2）  
やすい（-2）

## 形容詞に付属語が付いた場合の発音とアクセント

傾向：付属語は、前にある形容詞部分のアクセントに、影響を与えない物が多い。アクセントは変わらない。

### 基本接続

#### 平板式付属語

付属後の内、「下がり目」を持たないもの。

「傾向」のとおり、形容詞部分のアクセントに影響を与えない。形容詞部分にそのまま連なる。

##### a. 単純型【だけ】

形容詞部分にそのまま連なる。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

(例) 甘い+だけ = 甘いだけ (0)

$$\textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

(例) 青い+だけ = アオ↓イダケ

一般に、付属語にさりに付属語が連なるときには「下がり目」をはさむ。

(例) 甘いだけ↓だ

##### b. 「下がり目」挿入型

形容詞部分が「平板式」の場合には、間に「下がり目」をはさむ（その「下がり目」が1拍前に移った形も併用される）。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \textcircled{O} \downarrow \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} \text{ または } \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

(例) アマイ↓ト または アマ↓イト (甘いと)

$$\textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet} = \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \textcircled{\bullet} \textcircled{\bullet}$$

(例) ウマ↓イカラ (上手いから)

形容詞部分が「起伏式」の場合には、形容詞部分にそのまま連なる。

#### 【平板式付属語【下がり目】挿入型】

が、から、けれど、し、た、たら、て、です、って、と、は、ば、なら、のだ、ので、のに

(例・平板式形容詞)

アマ↓カッタ (ら) (甘かった (ら))

アマ↓クテ (甘くて)

アカ↓ケレバ (赤ければ)

(例・起伏式形容詞)

ミジカ↓カッタ (ら)・ミジ↓カカッタ (ら) (短かった (ら))  
 ウレシ↓クテ・ウレ↓シクテ (嬉しくて)  
 ア↓オケレバ・アオ↓ケレバ (青ければ)

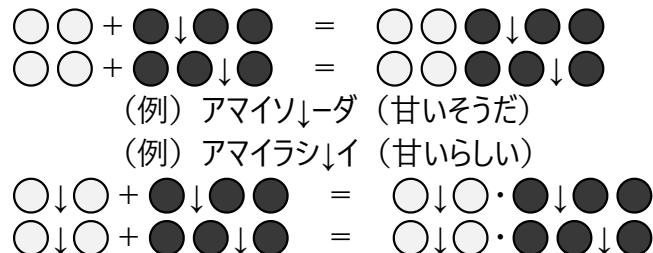
なお、起伏式の形容詞は、このような形に活用したときに、「下がり目」が1拍前に移る型も使われている。つまり、起伏式形容詞に「(かっ) た』(かっ) たら』(く) て』(く) は』(け  
 れ) ば」などに連なった場合には、2つの型が併用されている。このように「下がり目」が1拍前に移る傾向は、短い（三拍以下）形容詞ほど強く、長い（四拍以上）形容詞では余り顕著ではない。

### 起伏式付属語

付属後の内、「下がり目」を持つもの。  
 「傾向」の通り、形容詞部分のアクセントに影響を与えない。

#### a. 単純型

形容詞部分にそのまま連なり、付属語の「下がり目」も生きる。



#### 起伏式付属語（単純型）

[1]

くらい・ぐらい、そうだ（伝聞）、ところが、ばかり、ない、なかつた、なくて、なければ、なる、みたいだ

[2]

らしい

#### (例・平板式形容詞)

アマクナ↓イ (甘くない)  
 アマクナ↓カッタ (甘くなかった)  
 アマクナ↓クテ (甘くなくて)  
 アマクナ↓ケレバ (甘くなければ)  
 アマクナ↓ル (甘くなる)

#### (例・起伏式形容詞)

ウ↓マクナ↓イ・ウマ↓クナ↓イ (上手くない)  
 ウ↓マクナ↓カッタ・ウマ↓クナ↓カッタ (上手くなかった)  
 ウ↓マクナ↓クテ・ウマ↓クナ↓クテ (上手くなくて)

ウ↓マクナ↓ケレバ・ウマ↓クナ↓ケレバ (上手くなければ)  
 ウ↓マクナ↓ル・ウマ↓クナ↓ル (上手くなる)

### b. 「下がり目」挿入型 〔だろう・でしょう〕

形容詞部分が「平板式」の場合には、間に「下がり目」がはさみ、付属語の「下がり目」が生きる〔下がり目〕をはさまない形もまれに使われる)

$$\begin{aligned} \textcircled{O} \textcircled{O} + \bullet \bullet \downarrow \bullet &= \textcircled{O} \textcircled{O} \downarrow \cdot \bullet \bullet \downarrow \bullet \\ &= \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \cdot \bullet \bullet \downarrow \bullet \\ &= \textcircled{O} \textcircled{O} \bullet \bullet \downarrow \bullet \end{aligned}$$

形容詞部分が「起伏式」の場合には、形容詞部分にそのまま連なり付属後の「下がり目」も生きる。

$$\textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \bullet \bullet \downarrow \bullet = \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} \bullet \bullet \downarrow \bullet$$

### 式保存型 〔そうだ〕(推量))

形容詞部分が「平板式」の場合には、全体として「平板式」になる。

$$\textcircled{O} \textcircled{O} + \bullet \bullet \bullet \bullet = \textcircled{O} \textcircled{O} \bullet \bullet \bullet \bullet$$

形容詞部分が「起伏式」の場合には、全体として「起伏式」になる〔下がり目〕の位置が、形容詞部分から付属語部分に移る)。

$$\textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \bullet \bullet \bullet \bullet = \textcircled{O} \textcircled{O} \bullet \downarrow \bullet \bullet$$

### 付属語不干渉 〔すぎる〕(推量))

形容詞部分のアクセントが消え、付属後のアクセントが生きる。

$$\begin{aligned} \textcircled{O} \textcircled{O} + \bullet \bullet \downarrow \bullet &= \textcircled{O} \textcircled{O} \bullet \bullet \downarrow \bullet \\ \textcircled{O} \downarrow \textcircled{O} + \bullet \bullet \downarrow \bullet &= \textcircled{O} \textcircled{O} \bullet \bullet \downarrow \bullet \end{aligned}$$

(例) うますぎ↓る

[http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/search/index/category:4/sortprefix:accent/narabi1:kata\\_asc/narabi2:accent\\_asc/narabi3:mola\\_asc/yure:visible/curve:invisible/details:invisible/limit:20](http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/search/index/category:4/sortprefix:accent/narabi1:kata_asc/narabi2:accent_asc/narabi3:mola_asc/yure:visible/curve:invisible/details:invisible/limit:20)

## 形容詞一覧表

(平板式・起伏式(3拍以下)、起伏式(4拍以上))

起伏式の形容詞は、「下がり目」が1拍前に移る型も使われている。つまり、起伏式形容詞に「(かっ) た』(かっ) たら』(く) て』(く) は』(けれ) ば」などに連なった場合には、2つの型が併用されている。このように「下がり目」が1拍前に移る傾向は、短い(三拍以下)形容詞ほど強く、長い(四拍以上)形容詞では余り顕著ではない。

《例・3拍以下》あおい → あ↓おく(青い)

《例・4拍以上》かわいい → かわい↓く(可愛い)

終止形(0、-2・-2)

連用形中止(～く)(0・-3、-2)

～さ(0・-3、-2)

### 平板式付属語

単純型(形容詞部分にそのまま連なる)

だけ(0・-4)

#### 「下がり目」挿入型

が(-2、-3・-3)

から(-3、-4・-4)

けれど(-4、-5・-5)

し(-2、-3・-3)

た(-4・-5、-4)

たら(-5・-6、-5)

って(-3、-4・-4)

て(-3・-4、-3)

です(-4、-3・-4)

と(-2、-3、0・-3)

は(-2、-3・-4、-3)(形容詞の連用形に付く)

ば(-4・-5、-4)

なら(-3、-4・-4)

のだ(-3、-4・-4)

ので(-3、-4・-4)

のに(-3、-4・-4)

### 起伏式付属語

単純型(形容詞部分にそのままに連なり、付属後の「下がり目」も生きる)

くらい・ぐらい(-3)

そうだ(伝聞)(-3)

どころか（-4）  
ばかり（-3）  
ない（-2）（形容詞の連用形に付く）  
なかつた（-4）（形容詞の連用形に付く）  
なくて（-3）（形容詞の連用形に付く）  
なければ（-4）（形容詞の連用形に付く）  
なる（-2）（形容詞の連用形に付く）  
みたいだ（-4）  
ようだ（-3）  
らしい（-2）  
「下がり目」挿入型  
だろう（-2）  
でしょう（-2）

式保存型（形容詞部分にそのままに連なり、付属後の「下がり目」も生きる）

そうだ（推量）（0・-3）

付属語決定型

すぎる（-2）

使われた資料・文献

NHK日本語発音アクセント新辞典（書籍版）

新明解日本語アクセント辞典（書籍版）

「Dictionaries」アプリ（物書堂）  
デジタル大辞泉 第二版

大辞林 第四版

新明解国語辞典 第八版

NHK日本語発音アクセント新辞典

Dogen's Japanese Phonetic Series